

J A静岡経済連とJ Aふじ伊豆は、キャベツを加工した後の残りかすから作る植物性堆肥の実証実験を富士宮市で始めた。出荷先の企業と連携し、野菜を堆肥として再利用する循環型農業の仕組みを構築し、食品ロス削減や営農コスト抑制を目指す。

# キャベツかすから

## 植物性堆肥

### J Aふじ伊豆、経済連

植物性堆肥開発のきっかけは、県東部8農協が合併して誕生したJ Aふじ伊豆が2022年、キャベツの加工部会を同市内に設立したこと。生産者の安定収益確保を目的に、現在は主に業務用のキャベツ出荷に力を注いでいるが、出荷先の田形青果(静岡市駿河区)では、加工時に出る芯や外葉などの廃棄物処理が課題となっていた。

このため、植物性肥料製造を得意とする企業と連携し、牛ふんなどと混ぜた堆肥の開発に着手。J A側は製造した堆肥を同年9月にこまめに散布し、12月から収穫を開始した。

総菜などの原料向けに力ツト加工を行う田形青果のキャベツ残さの廃棄量は、1日当たり約3ト。田形文秀社長は「環境配慮の重要性が増す中、生産者と連携して課題を解決したいと考えた」と話す。

現時点での成果はおおむね良好という。今後は数年間にわたって実証事業を重ね、堆肥の効果を検証する。経済連の担当者は「持続可能な開発目標(SDGs)

実証実験、コスト抑制へ

### 出荷先加工業者と連携



堆肥で栽培しているキャベツ=2022年、富士宮市

の取り組みとして、活用を幅を広げたい」と話す。(経済部・平野慧)



キャベツ加工後の残りかすから作る堆肥

### 2月の 病 害 虫 予 想

県病害虫発生予報の腐敗病ウマ類への影響は、1カ月前から、やや低く、とみられる。「イチゴ」はやや遅い。

調査では、ア寄生株率は(2・2%)花への寄生合、速やかかび病の発生を、発生を「タマネ

農  
林  
水  
産